

PROTOPOLIS

進化するオフィスへのアプローチ

Vol.2 1990 July

特集 California Epicurean

オフィスの楽園を求めて

対談 岩倉榮利 with 高松 伸

アジアの建築 紫禁城マニア



サンタモニカの ジャパニーズ・ウインド

IGARASHI STUDIO
イガラシ・ 스튜디오

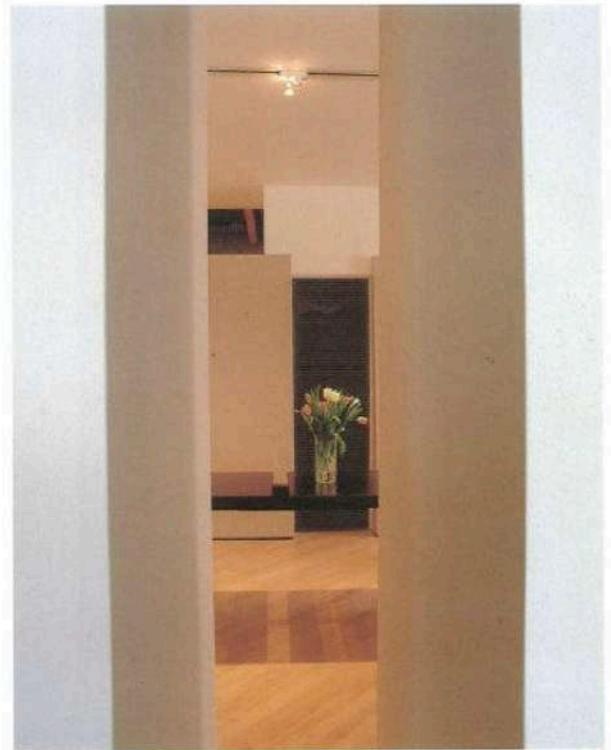


L.A.の代表的な観光地、サンタモニカ・ビーチ。そのビーチ沿いを走るオーシャン・アベニューは、海風が心地よく、一年中Tシャツ姿の若者たちが行き交う。そのひとつ奥の通りに「イガラシ・スタジオ」はある。

ここは、N.Y.現代美術館で毎年つくられるカレンダーのデザインなどで、世界的に有名な日本人デザイナー、五十嵐威暢のアメリカのオフィス。彼自身は、多忙のため年に数回しかここに来る機会はない。けれど、サンタモニカの陽気でのんびりした雰囲気の漂うこのオフィスは、時に複雑な東京を離れた、落ち着いて仕事や思索に耽る隠れ家となる。

このインテリア・デザインを担当したケン・タナカは、L.A.で仕事を始めて二年になる気鋭の日本人デザイナー。五十嵐威暢がUCLAで教鞭を執っていた当時の教え子だといふ。

そんなふたりがディスカッションして決めたインテリアは、ハイ・テックとロー・タッチをミックスし、モダンな日本らしさを少し加えたもの。和紙をつかった障紙は、五十嵐威暢の友人のデザイナー、森島健の作品。ブ



1

レゼンテーション・ルームとワーキング・スペースの間には、スリットの入ったパーティションを配した。ワーキング・スペースの天井は、あえて手を加えずパイプも剥き出しのまま。広くはないスペースだが、決して狭さを感じさせない。

リゾート地の長閑さと、五十嵐デザインの持つハイモダンを上手くブレンド。そんなスタイルが訪れる人の心を引きつける。

「今、L.A.では、家具の店が異常な勢いで増えているし、店自身もインテリアに凝り始めていますよ。ここは、雨も少ないし、デザイナーも自由なデザインや素材を試みる事が可能なんです。その点で、この街はアドバンテージを得ているってことなんです。事実、ファイブ・アートの中心も今やN.Y.からL.A.と移行しつつある。これから期待できる街ですよ。」

そう語ってくれたケン・タナカ。彼自身がオフィスに一番求めるものは、広さよりも、高さ、だと。それはカリフォルニアの抜けるような青空に通じるのかも。

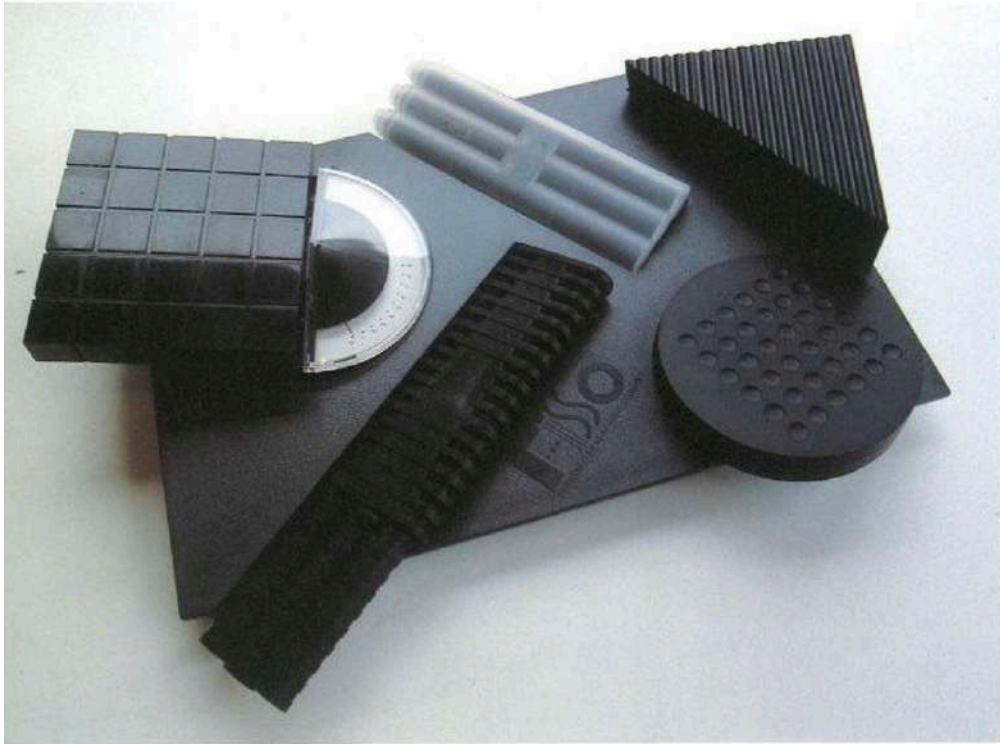


2



3

2



5



4



7



6

- ①スリットの入った部屋のパーティション
- ②イガラシ・スタジオの入るビル外観
- ③五十嵐威暢デザインの電話機と民白らせレクトしたチェアが置かれたオフィス入口
- ④ワーキング・スペースから見た部屋のパーティション、収納機能も兼ねている
- ⑤五十嵐威暢デザインのステイショナリー
- ⑥一切内装には平を加えず、天井もむき出しのままのワーキング・スペース、ここでもロン・レゼックのデスクが愛用されていた
- ⑦モダンでリフスティケイティッドな雰囲気があるプレゼンテーションルーム